

時代とともに

第3回

社会保障50年：編集者に育てられる

神奈川県立保健福祉大学名誉教授 山崎 泰彦 やまさきやすひこ

昭和20年生まれ。専門は社会保障の制度・政策論。社会保障研究所研究員、上智大学教授、神奈川県立保健福祉大学教授等を経て、平成23年より現職。公職として、社会保障制度改革国民会議委員、社会保障審議会委員等を歴任し、現在、社会保障制度改革推進会議委員、共済組合連盟会長などを務める。



大学を定年退職して以来、9年近くになる。この年齢でも非常勤講師等で教鞭をとっている人もあり、そういう話に水を向けられることもなくはないのだが、自分でも驚くくらい気がのらない。

大学時代はというと、自宅で机に向かう時間のほうが長く、出校するのはせいぜい週3日くらい。それも1日に1、2コマの授業を受け持つ程度。授業があるのは年間30週程度で、休暇も長い。大学に雇われているという意識はほとんどなく、自由業者と変わらない生活を長くしていた。ただ、大学時代の終わりころには大学の運営という雑務にかかわることが多く、それが結構負担になっていた。また、学生との年齢差が広がるにつれて、コミュニケーション・ギャップを感じようになっていた。加えて、どうも人を育てるといふ教員には向いていなかったのではないかと、とも思うようになっていた。

そういうわけで今では、大学人としての生活にはすっぱり縁を切って、まったくの自由業である。とはいえ、国・自治体の審議会等の雑務で、ほどほどに忙しくしている。そのうち会長・座長・委員長等の肩書がつく役職が9つある。東京大学名誉教授で現津田塾大学教授の森田朗教授が自称される「座長業」というものがあるとすれば、私もその末端に座らせていただけるのかもしれない。

その座長業もいずれリタイアしよう。その後に残るものがあるかどうか考えてみると、「物書き」だけはなんとか残りそうだ。現状では、共済組合連盟機関誌『共済新報』の小論など、平均すれば月3本くらい脱稿している。書くことを通してあれこれ考えごとをするのは、多少の難儀はあるが楽しい。

とはいえ、雑誌社等に自分で原稿を持ち込んだことはほとんどない。持ち込み原稿として、はっきり記憶にあるのは3回。その1つは、本誌の「受給年齢の選択を考える」(2017年10月)。あと2つはいずれも社会保障研究所の『社会保険旬報』で、書きたいことがあればいつでも誌面を提供するから、という当時の笹川浩一編集長のお言葉に甘えて書かせていただいたことがあった。

というわけで、私の書き物の大半は依頼原稿なのだが、これには訳がある。私が30歳代の半ばのころ、友人が専門誌の編集をしていて、「原稿は書いてほしいテーマで、書いてほしい人に書いてもらうもの。持ち込み原稿を安易に掲載しては、雑誌の価値が下がる」ということを口癖のように話していた。確固たる編集方針を持って、本当にほしい原稿をとることこそ編集者の腕前というわけである。

結局、私はそういう編集者の依頼を受け、その時々政策課題に向き合うなかで、思考を深めてきたことになる。たんなる依頼にとどまらず、内容についても多少なりとも注文を受け対話をすることが、その契機になったことは間違いない。編集者に育てられ、今日にいたった社会保障50年の人生ということになる。作家が出版社・編集者、役者がプロデューサー・監督に機会を与えられ、育てられるのと同じである。感謝。